

## 筑波大生における筑波大学附属図書館の OPAC 利用と評価

飽田 恵美

2010年3月、筑波大学附属図書館のWebサイト(以降、Tulipsと略す)はシステム更新に併せて、OPAC検索部分をいわゆる「次世代OPAC」へと変更するなど、新しい機能を増やし、サイト全体のデザインも一新した。この「次世代OPAC」を導入する動きは北米を中心に世界的に起こり、ここ数年で日本でも導入されるようになった。この「次世代OPAC」はOPACや情報探索に関する知識をほとんど持たない初心者であっても簡単に何でも検索できるようなシステムを目指している。そのため、所蔵検索で蔵書と一緒に電子メディアを検索できると同時に、検索結果の表示に対してサーチエンジンを意識した「関連度順」というソートを行なう機能が実装されている。すなわち、このシステムにおいては、利用者は「利用者は様々な形態のメディアを一括検索することができ、加えて検索結果の適合性判断に対して支援を行なうOPACを求めている存在」として想定されているのである。ただし、この想定が正しいかどうかの調査はこれまで行なわれてこなかった。そこで本研究では、利用者のOPACに対するニーズを明らかにすることを目的として、利用者が情報探索において現状のOPACをどのように利用し、位置づけているのかについて調査した。

より具体的には、知識情報・図書館学類4年生11名を対象に、卒業研究における文献探索の方法、OPACの利用と評価についてインタビューを行なった。ここでは、研究のテーマ、具体的な文献探索の方法、OPACの評価についてたずねた。その結果を、研究内容から「文献調査」「システム構築」「フィールドワーク」の3つに分類し、研究内容や使用する文献の形態によって文献の探し方に違いはあるのか、文献の探し方によってOPACの利用の仕方や認識、OPACへの評価が異なるのか分析した。

調査の結果、研究内容による文献の探し方には、あまり違いがないことがわかった。文献を探すときは、文献の形態ごとに検索システムを使い分ける人が多く、図書を探す場合にOPACが利用するという意見が圧倒的であった。また、雑誌論文の現物を入手するために、図書館に雑誌があるかどうかを確認する際に利用されることも多い。このようなことから、OPACは、利用者が図書館における蔵書検索や位置の確認に利用するためのツールとして認識されていると考えられる。そのため、利用者はOPACに対して、様々な機能が付加されることよりも、検索の処理速度の向上などを求める傾向にある。また、利用者は文献を探す際に自分で見て判断したいという意識もあるので、OPACに利用者の判断を支援するようなシステムはあまり必要ないと考えられる。

(指導教員 松林麻実子)